

【氏名】上野 香

【所属大学院】(助成決定時)

リヨン第二大学 人文社会学 古代言語・歴史・文明学科

【研究題目】

古代エジプト新王国―第三中間期(B.C.1550-747)のテーベにおける国家神アモン信仰の
推移調査 ―彫像および石碑(ステラ)の分析―

【研究の目的】

本研究は、古代エジプトの最盛期に、一地方神から国家神の地位にまでのぼりつめたアモン神への信仰形態の推移を、残存する歴史史料(彫像および石碑)に照らし合わせて、統計的に分析・解明することを目的としている。

近年、欧米諸国の考古学分野では、社会学的、経済学的見地から当時の社会動向を探る試みが、最も学術的要請の高いものとなっている。

本研究もこれらの研究動向に従い、当時のエリート層(王族、神官、官吏)並びに労働者階級層(主として王墓造営職人、商人)がアモン神へ奉納した彫像や石碑に残された神像の図像・賛辞の変化を作成年代(第18王朝―第24王朝)や出土場所(神殿・墓・居住地)に応じて統計的に分類することにより、アモン信仰の推移を社会学的見地から解釈してゆく予定である。最終的には、各社会階級層が国家神に対しいかなる信仰意識を持つに至ったかの軌跡をたどることで、この神にどのような属性・権能が付与されていったのかを解明してゆきたい。

【研究の内容・方法】

本研究の進行手順は主として三過程に分かれる。

第一過程では、新王国時代から第三中間期のテーベで出土した奉納彫像、石碑のうち 1)アモン神の図像と 2)アモン神の属性を示す形容辞を刻印した史料を収集する。博士論文では、すでに出版されている240件のデータ(修士論文時に収集)に加え、各国の主要エジプト博物館ならびに現地(現ルクソール)に赴き、未発表のデータを中心に計500件ほどのデータが収集できた。

第二過程では、収集した史料より、統計分析のための指標データを抽出し、データベースを作成する。分析指標の主要項目は、以下の通り。

- ① 出土地: ナイル川東岸の神殿区域とナイル川西岸の葬祭神殿並びに労働者居住区域。
- ② 史料年代: 第18~20王朝(新王国時代)、第21~24王朝(第三中間期)。
- ③ 史料所有者の社会階層: 王名称号から判断される王自身の所有物。私人の場合、主要区分として、聖職者、官吏、軍人、職人・労働者層に分ける。
- ④ 図像: A-1.アモン神彫像の類型化: 単身立像、複数坐像、等。A-2.石碑機能の類型化: 葬祭・記念碑、奉獻碑、等。B.アモン神の外観の類型化: 人型、聖獣型(羊・鷲鳥・蛇)、人獣混合型。

C.神像標識のリスト作成。D.アモン神と共に描かれる他の神々及び人物のリスト作成。

⑤賛辞：通常神名の直後に羅列されているアモン神の属性を形容した賛辞のリスト(例：創造神、神々の王、祈りを聞く者、等)を作成し類型化。

最終過程では、各分析指標を縦横に掛け合わせ、時代・統治者ごとに見られる信仰形態の推移を各社会層ごとに分析する。さらに、賛辞や図像形態の選択嗜好傾向を観察することで、各時代・各社会階層においてどの神属性がより求められていたかを観察する。

総合解釈は、当時の政治、経済的社会動向(王朝交代、遷都、対外戦争、等)に照らし、異なる社会階層間の相互影響も考慮して行う。最終的には、こうした分析結果をふまえて、統治者によるアモン神への権力集中過程の図式化を試みる予定である。

【結論・考察】

テーベは、国家首都としての黎明期にあたる新王国初期、アモン神迫害期、信仰復興期、デルタ地帯への首都変遷後にも続く充実期、新王朝末期の経済混乱期、聖職都市として機能する第三中間期と、その都市機能を変遷してゆくが、アモン神の図像表現および形容辞の形態も時代の要求に応じた変遷を見せる。初期は、王族の権力継承権を正統化するための媒体としての役割に即した、表現形態が好まれる一方、私人には、王族が示す典型的なアモン像(人型)は浸透していない。彼らは、かわりに聖獣の姿でアモン神を描くことで、信仰心を表現していた。この双極性は、相互に浸透しあい、王族、私人両者の史料に表現されるようになるが、末期には、私人の信仰形態はより積極的になり、いままで王族のみに許されていた人型アモン神に直接祭祀を執り行う私人の姿が登場し、第三中間期に引き継がれる。

このように、“信仰”という具体的には確認しづらい人間の所為も、古代人の残した奉納物に残された表現形態の変容をたどることで、解釈が可能となる。